
ハイブラウプリズン

ペムペル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイブラウプリズン

【Nコード】

N4782Q

【作者名】

ペムペル

【あらすじ】

いち看守にすぎないわたしと、刑務所を統治するアンドロイドたち、そして頭のおかしい囚人ども。どれが本当の生き物なのだろう？

具体的にいえば、一か月の生活費と三百本のタバコ、十リットルの安酒と一冊の本。

それらを買ってちよくなるくらいが、わたしの月給である。満足はしている。アンドロイドの普及によって低学歴者が淘汰されてゆく時世において、ひとまず毎日を生きていけるというのは幸運なことだろう。たとえアパートは使い古したまな板みたいな臭いがして、与えられた仕事は変質者たちの見張りをする看守だとしても。

西岸刑務所。わたしの職場は実に面白みのない名前を身に着けているが、収容されている囚人たちはこっちの頭がおかしくなるほど奇抜な野郎ばかりだ。この刑務所に送られてくる犯罪者は、まずまともではない。語弊がないようにいいかえると、まずまともな犯罪者ではない。

精神に異常が認められた犯罪者、それでいて無罪の冠を与えるにはいささか正常すぎるという犯罪者が服役しているのが西岸刑務所である。ヘミングス所長曰く「人間としていちばんやっかいな精神状態を保つ種類」。そのため、通常の刑務所とはやや異なる体制がとられている。わたし自身、かつてはそういった「通常の刑務所」に勤務していたのだが、あそこと比べると、こちらは半分精神病院のようなものだ。仕事は当然こちらのほうが多大なストレスを伴うのだが、給与はずっと安い。つまるところわたしは左遷されていたるわけだ。

まな板の臭いとともに朝が始まり、昨日と同じ服に着替える。服はワンセットしか持っていないからだ。

悲鳴をあげるドアを無視して、職場にむかう。朝食はポケットに

入っていた示準化石のようなビスケットだ。葬式みたいな味がする。タバコをくわえる。曇り空はタバコの紫煙と見分けがつかないほど濁っている。

刑務所の周りは廃れきって、めったなことがなければ明朝に人影を見ることはない。みな家に閉じこもっているからだ。閑散とした家並みからは睡眠の気配すら感じ取れない。わたしにはこの街そのものが一種の刑務所のように思えてならない。

ところで、わたしの視力は二・〇近くあるが、この周辺に海は見当たらない。もっともイメージからかけ離れたようなこの土地に何を思っ「西岸」と銘打ったのか、いつもわたしは頭を悩ませている。ここには失望の海が広がっているだけだというのに。

せめてもの海岸らしさは真冬の冷たい風だけだ。そういう意味も含めて、冬ほどこの界限に似合う季節はない、と考えている。

とぼとぼと歩いていると、寒さであかぎれをおこしたような家々の壁が、わたしを傍観しているような気がする。

彼らは運命論のペンキを塗られたコンクリートに違いない……などと、そういった感覚がわたしの寂しさの裏返しであろうことには気づいている。これからの人生の折り返しを、わたしはずっと刑務所通いに費やすのだろうか……そんなことを思う日もある。

が、喪失感に押しつぶされようが足を止めることは許されない。いまの職を失ったら、わたしには他にどんな選択肢が残されているのか？ 少なくともわたしの想像力では思いつかない。

だから今日も明日も狂人の面倒を見に曇り空の下を歩くのだ。そうまでして残る価値がこの世界にあるかはわからない。しかし永遠に続くような倦怠の渦中でも、自殺を考えたことはまだ一度もないのだ。

西岸刑務所の裏門で、いつものようにバーコードチェッカーにカードキーをかざす。しかしどういいうわけか反応しない。エラーメッセージすら発生しないというのはどういうことだろう。

門は壁にならってぴたりと閉じられていて、紙一枚ぶんの隙間すらない。自分の居場所から拒絶されるというのはつらい。しばらくのあいだ、他にすべを知らない小熊のように、カードキーを近づけたり遠ざけたり、思いつく限り力を尽くしたが、門は処女のごとくむつつりと黙ったままだ。

闇市で買った腕時計がわたしをせかしている。遅刻はちよつとまズい。なにしろここで働く十名以上のアンドロイドに遅刻という概念自体を受け入れるだけの容量が残っているのか怪しいものだから。やむなく正門へ向かう。刑務所の外部の人間としてアンドロイドと接するのはこれが初めてだ。おのずと不吉な予感がこみあげてくる。

正門は仰々しい様相をした大きな鉄の門である。外観だけなら十分に刑務所らしさをかもしだしている。「係員呼び出し」と記された冷たいブザーを指で押した。ブザーが鳴り終わるより先に、正門脇の錆びついた受付シャッターがうめき声をあげて開き、来訪者対応型アンドロイドが首をつきだした。見た目は人間と変わりないが、じつとわたしを観察する目の底にあるのは光ではなく、サーモグラフィ機能を持つレンズである。来訪者の体温が異常に高かったり、呼吸が乱れたりしていた場合、彼の適切な判断によってシャッターが下ろされる。幸いにもわたしは彼のお眼鏡にならなかったらしい。アンドロイドと目を合わせることだけは何年たっても慣れない。こいつとだったら、こいつの三割しか仕事のこなせない腰曲りの老翁と働くほうがましだ。

「お名前と住所をどうぞ」

「テリー・グライトマン。住所は西岸刑務所地区グリーンマンション023」

黴のように湿ったグリーンを想像する。

アンドロイドの顔面から、カタカタと虫が歩き回るような音がする。わたしの戸籍を検索にかけているのだ。住所と名前から引っぱり出した素顔データを、現在進行でレンズに移っているわたしの姿と照合する。

「テリー・グライトマン、確認されました」

「中に入れてくれるか？」

「カードキーをどうぞ」

「リーダーが反応しないんだ」

わたしはそれをアンドロイドに渡した。アンドロイドは受け取って、自分の頭のバーコードリーダーに差し込んだ。本来ならこれが刑務所に入るための正式な手続きなのだ。こいつらと顔を合わせるのが嫌で毎日回り道をしているわけだ。

「これは使用期限が切れています。更新をされていないようです」

「更新？　どういうわけだ、聞いてないぞ」

「カードキー書き換えの連絡があったはずです」

「だから、聞いてねえんだよそんなこと。どうにかしてくれよ」

「カードキーが読み取れないわけですから、あなたが当刑務所の事務員である確認は不可能です」

杓子定規な受け答え。さらに神経を逆撫でするのはこいつの妙に甲高い、フライパンをはさみで切っているような電子音声だ。既にわたしの思考回路は渋滞、いや接触事故さえ起きていたかもしれないが、紳士としての自制心がのどを締め付けていたのだ。

「では、では受付くん、わたしはどうやって証明するべきかね？」
アンドロイドは無表情のままいつてのけた。

「拘置委員会本部まで行って新しくカードキーを作りましょう」

わたしは冷たい体を押しのけて、強引に刑務所内へ駆け出した。拘置委員会本部は最寄りの駅から、寝台特急に二日ほど揺られる距

離の首都に構えている。

細い、特殊合金の腕がにゅっと伸びて、細い、特殊合金の指が、細い、たんぱく質のわたしの腰をつまみ上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4782q/>

ハイブラウプリズン

2011年4月17日14時10分発行